博 士 学 位 論 文 要 約

論 文 題 目：　西田哲学がビラン哲学にもたらしうるもの
氏　　名：　鋳物　美佳

要　　約：

目的と課題の背景

本論文の目的は、メーヌ・ド・ビラン哲学が開いた問題圏の延長線上に西田幾多郎を位置づけること、および西田哲学がビラン哲学に対してどのような展開をもたらしうるかを、ビラン哲学の中心的主題のひとつである意志的運動を中心に論ずることである。

ビランは、自己目的化された運動の中に、〈私〉が〈私〉自身に気付く、〈私〉が〈私〉自身の存在を直接的に知る機会を見出した。彼は、運動という現象を、運動する本人の主観的視点から捉え直すことで、対象化以前の動的な〈私〉についての直接的な知を捉えることに成功した。すなわち抽象的ではない具体的〈私〉の把握である。ビランの企図は、哲学以外の分野においても、運動を自己同一性の回復に役立てようとする今日の心理療法や運動理論の先駆的見立てであるといえるだろう。

しかしながら、そのようなビラン哲学は、今日多く研究されているとは言えない。その理由としては、まずビランの死後の草稿紛失や、不完全な著作集が長年刊行されていたことによる、文献的な未整理が挙げられる。しかし問題は文献だけではない。今世紀に入って、現在望みうるかぎりでほぼ最善のかたちで新たな全集が刊行されたにも関わらず、未だにビラン研究はフランス哲学研究において、日の目を見ているとはいえない。ビラン哲学研究の不振の理由のひとつは、ビラン哲学自身に内在する問題にも依っているように思われる。すなわちビランは、運動を論じる際に、能動と受動の二分法を用いるが、その区分はあまりに単純で、今日のわれわれにとっては、体系的すぎるのである。

とはいえビランの用いた方法が単純であるとはいえ、その俎上に載せようとしていた主題までも棄却してしまうのは、既に述べたビラン哲学の先見性からして、残念に思われる。ビランの文献ではなく、ビラン哲学の精神を追うことで、今日的な形でビラン哲学を復権させることができるのではないだろうか。本論は、そのための一試論である。

方法

このような目的のため、本論では、ビラン哲学の延長に西田哲学を位置づける。ビランも西田も、〈私〉が〈私〉について知る瞬間を、抽象的思弁によってではなく、具体的経験に基づいて追求することを自らの課題とした。二人の哲学的関心はきわめて近かったと言えるだろう。両者の親近性は文献的にも明らかである。西田は若い頃からビランを読んでいたし、書簡ではビランへの共感を述べている。また研究史としても、ビランとの比較で西田を論じた山形頼洋（『西田哲学の二つの風光』, 2009）や黒田昭信（*Enjeux, Possibilités*

et limites d'une philosophie de la vie, 2003）の研究がある。

特に、本論において西田を論じる意義は、先に見た、ビラン哲学の抱える能動と受動の問題に関わる。西田は、とりわけその後期の思想（『哲学論文集第一』,1935 以降）において、〈私〉が〈私〉について知る瞬間だけでなく、その瞬間が於いてある場所を、深く考察の対象に入れるようになった。この於いてある場所こそ、そこにおいて能動と受動の立ち現れる場所である。後期西田哲学は、〈私〉が〈私〉について知るとしても、それはどこでもない場所で知られるのではなく、ある特定の場所であること、もっと言えば、その場所自体が生成する結果として〈私〉が〈私〉について知ることが可能であると考えるに至った。この西田における自己生成する場所という概念を手掛かりにすることで、ビランにおける能動と受動の単純な二分法を補完する思想が、西田の中に見出されるのではないだろうか。そしてもしそれが可能であるとするなら、そのような西田的解釈は、どのような意味で、どれほどまでビラン哲学を掘り下げることができるのか。

以上の論点を踏まえたうえで、西田哲学がビラン哲学にもたらしうるものを論じることで、ビラン哲学が提示しようとした運動する身体として現れる〈私〉を、本論は再構築する。

章構成

論文は、四章で構成される。第一章ではビラン哲学の輪郭が示され、第二章ではビラン哲学の限界を確認したあと、ラヴェッソン形而上学の比較研究が行われる。第三章は、西田幾多郎によるラヴェッソン読解を分析し、第四章では、ビラン哲学と西田哲学との比較研究が論じられる。以下に各章要約を記す。

各章要約

第一章では、ビラン哲学の輪郭が示される。すなわち、ビランの哲学的企図を確認したのち、ビラン哲学の前提となる諸概念を見、ビランがいかなる点において、その先駆者たちを批判し、超克したかを論じる。そのうえで、ビラン自身の立てた、〈私〉が〈私〉に気付く瞬間、ビランの言葉でいえば、直接的覚知 Aperception immédiate に至るまでの過程が示され、ビラン哲学の独自性、またその賭けが明るみに出される。

まずビラン哲学の企図とは、〈私〉という主体にとって否応無しに現れる気分などの受動的経験に対して、〈私〉の能動性はどこまで自分の力を発揮することができ、領域を確保することができるのか、を画定するところにある。ビランによれば、受動的経験とは、その原因が自分自身にないことであり、能動的経験とは逆に、原因が自分自身であるところの経験である。したがってこのような枠組みにおいては、〈私〉の能動性が知られるということが、〈私〉が〈私〉自身について余すところなく直接的に知ることと（直接的覚知）となる。

ところで、自分自身の能動性を知るためには、それに対する抵抗に出会わなければならない。抵抗のないところでは、能動性は無限に広がり、自分自身を省みる契機を欠くからである。ビランはこの抵抗についての最も原初的な経験を、〈私〉の意志に抵抗する〈私〉の身体に見出した。ここで問題となっているのは、運動における内的な（あるいは最も内

側であるという意味での「内奥の」intime）感情である。すなわち〈私〉の意志によって、〈私〉の身体を動かそうとするとき、身体は多かれ少なかれ〈私〉の意志に対して抵抗し、あるいは飼いならされ、その結果、一つの運動という形を作り出す。それは対象化以前の直接的な知である。〈私〉が〈私〉の身体を動かすことによって、〈私〉は〈私〉自身を知ることができると、ビランは考えた。身体が自己意識の生成に深く関与していることを開示したところに、ビラン哲学の醍醐味がある。

またこの章では、反省と直接的覚知の分析を経ることによって、ビラン哲学において〈私〉が〈私〉を知るためには、意志的運動において〈私〉が動かそうとする身体と、動かされていると感じる身体が同一であることが、必要不可欠な要素であることが示される。したがってビラン哲学の枠組みにおいて身体が意識の生成に関わると考えることはすなわち、意識の自己同一性が身体の自己同一性に依拠することを明るみに出すことでもある。

第二章は、ビラン哲学の限界を示すところから始まり、次いでラヴェッソンによるその解決方法を示し、最後にビランとラヴェッソンを補完的に論じることの難しさ、ビランとラヴェッソンそれぞれの抱える困難を指摘する。

ビラン哲学の限界とは、すでに述べた能動と受動の二元論である。このためにビラン哲学は、能動性としての〈私〉という画期的な視点から出発したにもかかわらず、ビラン哲学の枠の中だけではすぐに暗礁に乗り上げてしまう。ビランは能動性としての〈私〉を措定する一方で、生命体の根源的様態として受動性を考えている。そこからは、受動的経験のうちからいかにして能動性が生じるのかという問いが不可避的に生じるが、ビラン哲学の中に十分な答えはない。

そこで、ラヴェッソンの『習慣論』がビラン哲学の補正的要素として読まれる。ラヴェッソンは、習慣についての論考を通して、習慣形成を可能にするのは、能動と受動のあわいの領域（ラヴェッソンの言葉でいうところの曖昧な能動性 activité obscure）であることを看破した。この領域のおかげで、能動的経験が受動的となり、受動的経験が能動的となる移ろいを論じることができる。能動と受動のあわいとしての習慣を深く考察したラヴェッソンを参照すれば、ビランにおける能動と受動の推移の問題は解決されるだろう。

しかしラヴェッソンは、もともとのビランの争点であった〈私〉が〈私〉に気付く瞬間、連続的な日常的経験の中で生じる非連続の瞬間について、あまり積極的に論じていない。ラヴェッソンの説く世界はすべてが生命に基礎付けられた合目的世界であって、断絶がない。したがって、ラヴェッソンはビランに対して補完的要素を提供するが、そのラヴェッソン形而上学自体が、ビラン的観点を欠いていることになる。次に問題になるのは、覚知の瞬間と習慣の連続性は、いかにして共存しうるのか、である。

第三章において、西田は、この文脈において、召喚される。最晩年の未完に終わった論文「生命」(1945)の中で、西田はラヴェッソンの『習慣論』を入念に分析し、注釈を加えている。第三章では、西田によるラヴェッソン読解を吟味することで、後期西田哲学の中にビラン的な自覚の瞬間とラヴェッソン的な習慣の連続性が共存していることが示される。このことは西田自身の意図するところでもあった。実際、「生命」の最後には、ビランおよ

びラヴェッソンによる内的知覚の哲学と、西田自身による場所的論理は、互いに補完し合う関係にあると述べられており、西田が意図的にビラン・ラヴェッソンを自身の哲学の中に組み込もうとしていることが読み取れる。

さて、西田によれば、この世に存在するものはすべて、ある特定の場所に存在している。この場所を西田は、「歴史的世界」と呼ぶ。それは一度きりの出来事の連なりである限りで歴史的と呼ばれ、また出来事が連なるがゆえに自己形成するものとして考えられている。西田は、この歴史的世界の形成作用を、習慣の作用と同定する。習慣を社会的なものと考えると、この西田の主張はもっともなものに思われる。このように習慣の連続的形成作用を認める一方で、西田は、〈私〉が〈私〉に気付く瞬間（西田の言葉でいえば「自覚」、ビランでいえば「覚知」）の特殊性も認める。それは、連続性の中にあるものが、連続性を破る瞬間である。意志的運動に重ねて、西田は自覚の瞬間を「内から外へは外から内へ」と形容する。ここに認められるのは、むしろビラン的な、意志が身体を規定することで身体が意志を規定しかえす、二重否定の関係である。では、連続的世界の中から、いかにして自覚の瞬間は生まれるのか。それは、歴史的世界の形成作用も、自覚も、いずれも行為的直観的に存在していることによる。「行為的直観」とは、行為と直観が従来考えられているように対立するものではなく、互いに規定しあうものとして存在していることを開示する西田の用語である。行為は直観によって変じ、直観は行為によって姿を変える、その絡み合いを指すものである。西田によれば、習慣も自覚も、根元には行為的直観があるのでなければならない。運動に意識的になるときも、無意識的に自然発生性に身を委ねるときも、そのような在り方を支えているのは行為的直観である。行為的直観という在り方が、習慣と自覚のスライドを可能にすると、西田は考えた。

ところでこのように習慣と自覚を貫く行為的直観的な在り方を措定することは、合目的世界観を拒否し、生成する世界に創造的要素を組み入れることでもある。それは、自覚の瞬間の特殊性を認めつつも、それによってその都度方向性を変えてゆく世界の連続性について論じることを可能にするからである。

最後に、第四章においては、第一章から第三章までを総合的に論じる立場から、ビラン哲学と西田哲学の比較研究が行われる。ここでは、西田がビラン哲学に与えた可能性と同時に、二人の決定的差異、またそこから明るみに出されるビラン哲学の特徴が明らかになる。

西田がビランにもたらした展開は、すなわち自覚する〈私〉に対してその「於いてある場所」という視座を与えたことから始まる。その結果、西田はビランの「動く」に「（自己形成する世界の中で、その世界の自己形成を担う要素として）作る」という意味をもたせた。このことは、ビラン哲学の発展として、妥当である。たしかにグイエが指摘するように、ビランにとって〈私〉の確実性は、〈私〉にだけわかるものであり、普遍化されないものであった。しかしそのことは、ビランの〈私〉が世界から断絶されたものであることを意味するのではない。ビラン哲学における固有身体（〈私〉の身体）とは、〈私〉に還元されない最初の「〈私〉ではない何か」であって、まさにこの固有身体によって〈私〉は否応なしに世界につながっている。ビランにおける意志的運動は、ラヴェッソンを経由した西田

において、創造あるいは表現に至る。

しかしまさにこの固有身体において、ビランは西田と袂を分かつ。西田哲学において〈私〉が作る物は、外的事物であれ〈私〉の身体であれ、ほぼ区別なく論じられている。しかしビランにとって固有身体は、意志に対して現れる最初の抵抗でありながら、のちには意志に従って外的世界を知るための道具になる点で、外的事物とは絶対的に異なる。西田との比較検討を通してビラン哲学に固有の物として浮かび上がるのは、この中間領域としての固有身体である。ここから、西田を経由した上での、ビラン哲学における固有身体の再構築という課題が浮かび上がる。

また第四章では、最後に、ここまでの論考で見出された能動的経験としての〈私〉が、ビランの最初の企図にどれほど応えることができたかも考察される。すなわち能動的経験は、いかなる受動的経験に対して作用しうるかが問われる。能動的経験としての〈私〉は、〈私〉の行う行為の責任主体であるという点において、受動的経験に対して有効であることが示される。

まとめ

以上の論考を通して、ビラン哲学における意志的運動は、固有身体によって〈私〉が〈私〉を知る瞬間であるだけでなく、世界のなかで表現する行為として捉え直すことが可能であることが示された。ビランの「固有身体」を表現主体として捉える試みは、これまでの研究には見られなかった点である。このことにより、運動する身体についてのビラン哲学を、世界の中で動く身体、あるいは身体表現理論として再構築する視座が与えられたといえる。

主な引用文献

Maine de Biran, *Œuvres de Maine de Biran*, tome I-XIII, J.VRIN, 1984-2002.
Maine de Biran, *Journal*, 3 vols., Neuchâtel, 1954-1957.
西田幾多郎、『西田幾多郎全集』第 1 巻～第 19 巻、岩波書店、1978 年～1980 年。
Félix Ravaisson, *De l'habitude, Métaphysique et morale* (Quadrige), PUF, 1999.
ほか

主な参考文献

AZOUVI François, *Maine de Biran, la science de l'homme,* J.VRIN, 1995.
GOUHIER Henri, *Les Conversions de Maine de Biran*, J.VRIN, 1947.
GOUHIER Henri, *Maine de Biran par lui-même*, Seuil, 1970.
HENRY Michel, *Philosophie et phénoménologie du corps, essai sur l'ontologie biranienne,* PUF, 2001.
JANICAUD Dominique, *Ravaisson et la métaphysique : une généalogie du spiritualisme français,* J.VRIN, 1997.
KURODA Akinobu, *Enjeux, Possibilités et limites d'une philosophie de la vie : Kitarô Nishida au miroir de quelques philosophes français*, ANRT, 2003.

MONTEBELLO Pierre, *La décomposition de la pensée, Dualité et empirisme transcendantal chez Maine de Biran*, Jérôme Millon, 1994.
PARK-HWANG Su-Young, *L'habitude dans le spiritualisme français : Maine de Biran, Ravaisson, Bergson*, ANRT, 1997.
小林敏明、『西田幾多郎の憂鬱』、岩波現代文庫、2011 年。
小林敏明、『西田哲学を開く　―〈永遠の今〉をめぐって』、岩波現代文庫、2013 年。
檜垣立哉、『西田幾多郎の生命哲学　―ベルクソン、ドゥルーズと響き合う思考』、講談社現代新書、2005 年。
村松正隆、『〈現われ〉とその秩序　メーヌ・ド・ビラン研究』、東信堂、2007 年。
山形頼洋、『声と運動と他者』、萌書房、2004 年。
山形頼洋、『西田哲学の二つの風光』、萌書房、2009 年。
ほか